

論文審査の結果の要旨

氏名：寺本 紘子

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：パーキンソン病患者におけるすくみ足と前頭葉機能の関連についての検討

審査委員：（主査） 教授 内山 真

（副査） 教授 木下 浩作 教授 徳橋 泰明

教授 阿部 修

パーキンソン病（PD）は黒質線条体ドパミン神経の変性・脱落により安静時振戦、無動、筋強剛、姿勢反射障害を4大症候とするとする神経変性疾患である。近年、これら運動症状に加えて、非運動症状の病態理解が治療上重要であることが指摘されている。なかでも遂行機能障害は、PD患者の日常生活の困難をもたらす、運動症状の1つであるすくみ足と病態が関連していることから注目されている。本研究では、PDにおける遂行機能をBehavioural Assessment of the Dysexecutive Syndrome（BADs）を用いて包括的に評価し、臨床的背景を調べ、すくみ足との関連について検討した。国際診断基準を用いPDと診断された65名を対象とし、うち43名にすくみ足を認めた。まず、すくみ足の有無と年齢、罹病期間、HYステージ、Mini-Mental State Examination（MMSE）、レボドパ換算量（levodopa equivalent daily dose: LEDD）、BADsの年齢補正標準化得点などとの関連を検討した。その結果、すくみ足のあるPD患者ではすくみ足のないPD患者と比較してBADsの年齢補正標準化得点が有意に低いことがわかった。次に、すくみ足とBADs、年齢、罹病期間、HYステージ、MMSE、LEDDの交互作用を評価するため、すくみ足の有無を従属因子、BADs年齢補正標準化得点、年齢、罹病期間、HYステージ、MMSE、LEDDを独立因子とし、多変量ロジスティック回帰分析を行った。その結果、HYステージ、BADs年齢補正標準化得点が有意な独立因子として検出された。これらからすくみ足はPDの重症度とは独立して、遂行機能障害に関連していることがわかった。両症状の背景には、前頭葉機能が共通している関与する可能性が考えられた。

本論文は、目的の設定、方法論ともに適確かつ緻密に構成されており、方法論的によく練られた研究であり、PDにおける遂行機能障害の病態理解に有用なエビデンスを提供するものである。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以 上

平成28年2月17日